

古今事物

ふらんす物語

永井荷風著

明治四十二年三月廿二日印刷
明治四十二年三月廿五日發行

定價金七拾五錢

付奥語物すんらふ

有所權在着

著者 永井荷風

發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地
大橋新太郎

印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地
市川七作

印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地
博文館印刷所

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座第二百四十番

博文館

序

千九百〇七年夏、横濱正金銀行雇人として、米國を去つて佛蘭西に赴き、此處に留る事僅かに十一箇月半なり。本書收る處の小篇は、當時の印象を失はざらんが爲め、銀行帳簿の陰、公園路傍の樹下、笑聲絃歌のカツフェー、又歸航の船中に記録したるを、歸國の後修正したるもの多しとす。前著米國小話集の名題にならひて、ふらんす物語と稱す。「放蕩」及「異郷の戀」二長篇の外は一度び諸雜誌に掲載したる事あり。又、卷中に掲ぐる名所圖繪は、巴里の大都中、著者の最も愛好散策したる場處のみを選び、寫眞畫は巴里の劇場を代表すべく、國立劇場四箇所を示したるものとす。

千九百〇九年正月

著者 識

—「目次」—

小説	放蕩	一
脚本	異郷の戀	六九
ふらんす日記		
除夜		一四三
晚餐		一六五
祭の夜がたり		一八九
蛇つかひ		二二三
ひとり旅		二五二
再會		二六五
羅典街の一夜		二八七

モーパッサンの石像を拜す……………三〇九

橡とちの落葉

橡の落葉の序……………三二一

墓詣……………三二三

休茶屋……………三三四

午すぎ……………三三七

裸美人……………三四〇

戀人……………三四六

舞踏……………三五三

美味……………三六一

舞姫……………三六四

かへり道

附
録

巴里のわかれ	三六九
黄昏の地中海	三九五
砂漠	四二一
惡感	四二九
西洋音樂最近の傾向	四四七
歌劇フオースト	四七五
歐洲歌劇の現狀	五二二
歐米の音樂會及びオペラ劇場	五二六
佛蘭西觀劇談	五四七

— (終) —

放

蕩

Il y a je ne sais quelle malsaine ivresse

A se laisser aller sans tenir un effet :

.....

L'ambition s'énerve et le cerveau s'embrûme,

La volonté s'en va dans le tabac qu'on fume.

D'ébranche—Louis Marsollean.

さもあらばあれ、身はまゝよと投捨る、

酔心地こそおそろしけれ。

功名の念しびれて心は曇り、

意志の力にくゆらする煙草の烟と消えて行く。

放蕩の詩——マルソロオ

一

外交官小山貞吉は、巴里なる帝國大使館の事務を終つて、其の門を出ると、きまつてシャンゼリゼーの角まで歩く。歩いて立止まる。こゝが其の日の思案の四辻である。廣い並木の大通を西の方、右へ上れば凱旋門を越して、自分の下宿したエトワルの界限。東の方、左手に下りて行けば、シャンゼリゼーが盡きて、其處からは、市中到處の繁華な街へ出る四通八達の中點、ブラス、ドラ、コンコルド。

すぐ家へ歸つて休まうか知ら。晚餐になるまで何をしやう。散歩しやうか。するな

ら、何處へ行かう。晚餐はどうしやう。何處で何を食はう。最初の中は、この四ツ角で、こんな事を考へるのも辛くなかつた、面白かつた。巴里でなければ出来ない獨身者の、かうした浮浪的の生活が珍しかつた。然し間もなく飽きた。寒い冬に出遇つたまゝ、急に隱遁して、下宿屋の食堂で、おとなしく食事する事にして居た。其れさへ飽き果てゝしまつた。再び最初の生活を繰返しはじめた。繰返すより仕様が無いとあきらめた。毎日、同じ料理、同じ下宿人、同じ畫の額、同じ壁に對するよりも、此の方がいくらか増しらしい。けれども又、毎日々々きまつて、何處へ行つて、何を食はうかと云ふ思案が、今では堪へがたい程うるさく感じられる。すつかり生活の興味を削いでしまふ。

そもく外交官試験に及第して、海外に出たのは八年前だつた。最初ワシントンに三箇年、ロンドンに二年居て、巴里に轉任してからが、又三年。

滿三十二歳の徴兵免除の年齢も、最初の願ひ通り、もう二三年後に過ぎて了つた。

今では日本に歸つても差支はないのだが、餘り長く海外に出て居ると、日本の時勢に後れたやうで薄氣味も悪く、又一方では、何だか失敗して田舎へ引込むやうな屈辱をも感ずる。親、兄弟、親族、朋友などの關係が、如何にも窮屈らしく感じられる。此儘居られるだけ長く、外國に遊んで居るに如くはない。その方が氣樂だ。歸るとなるといやでも歸つてから先の事を考へなくちやならん。前途を考へるに當つては、眞面目に過去を顧る煩が生ずる。顧るだけならよいが、解決の出来ない疑問が起る。疑問は煩悶だ。煩悶を避けるには、ぶら／＼無意義にやつて行くが一番だ。ぶら／＼やつて行くには、毎日々々大使館を退出後、飯を食つて寐るまでの間を、どうしてぶら／＼やつて行くべきか、その方法を考へなくちやならん。これだけは、どうしても免れ難い義務である。

十一月の曇つた空は、重く濕つた羅紗のやう、深い霧に閉されて、風の動きさへ絶えて居る。立續く並木は黒い雲の如く、其の暗澹たる木立の間からは、まだ四時過ぎ

と云ふのに、白く褪^あせた電燈の光がきらめき出した。世界第一の散歩道も、今は、見渡すかぎり淋しいものだ。其でも流石は巴里の事、三四臺、五六臺と、間を置きながら引續いて、馬車自働車が動いて行く。然し道が濕^{しめ}つて居るから、車輪の響は鈍^{にぶ}つて反響しない。其れ故、車はいくら早く走つて居ても遅いやうに見える。何れもまだ灯をつけずに居る。首を前に伸^のして馳^かける辻馬車の馬が、際^{きは}立つて瘦せて物哀れに見える。兩手に裾を引上げて小走^{こはし}りに、行交^{ゆきか}ふ馬車の間を巧みに、向側へと大通りを突切^{つぎ}つて行く女があつた。三頭立の馬に曳^{ひか}した大きな乗合馬車が、四角^{よしかど}に止るのをば、乗りはづすまいとて、三四人の人影が、後から追掛けて来る。その敷石の面は、霧でしつとり、滑^{すべ}りさうに濕^ぬれて居て、電燈の光が憂鬱に反映して居る。

貞吉の心は忽ち、冬の夕方の悲しさに冒されてしまつた。殊更、濕^{しめ}つた、静かな枯木^{かき}の色が堪えがたい程悲哀に不快に感じられた。餘りに悲哀で不快なのに、其れを避けるよりも、突差の反抗心で、其の色の中へ闖^{ちん}入^{にふ}してやらうと思つた。ブーロンユの

森に行つて見やう。時節^{じせつ}ちがひで、人は一人も居まい。其の不景氣な料理屋を騒がして見やう。自分ながら驚く程、この考が突飛で、且つ痛快であるやうな氣がした。貞吉は歩いて程もない、シャンゼリゼーの地下鐵道^{地下鉄}へ下りた。

人々の着て居る毛織物の、濕^{しめ}つた匂ひが胸惡く、ぷんと鼻についた。けれども忙^{せわ}しい群集の動き、プラットフォームの壁一面に貼つてある、けばくしい色の廣告畫、さほどには明くないが、如何にも夜らしく輝く電燈の光が、氣を引立たせる。上りの列車が向側のプラットフォームへ止つた。其の出るのを眺める間もなく、突進して來る下りの列車が、一等二等と上から札を下げた場所へ巧^{たく}みにきちんと止る。シャンゼリゼー、くくく、と呼ぶ役人の聲。飛び乗ると、車の中は人込みで暖い。電燈の光は赤く、鈍く、濁つて居る。貞吉は、いくら大使館の事務が暇だと云つても、暇であるだけ、同じ椅子に一日坐つて居るだけ、身體が疲^{つか}れて居る。忽ちいゝ心持になつた。エトワル、エトワル——次の停車場へ來た時には少し眠くなつた。が、忽ち、マイヨ

！。ポルトマイヨー、と人の呼ぶ聲。下りなけりやならん。貞吉は下りた。

巴里の市街が盡きて、番人の立つて居る鐵柵の向ふに、限り知られぬ長い街道、其の左手には、目的のブーロンユの冬の森が、肅然として擴がつて居る。あたりが、いやに廣く見えて、道は汚く泥濘どろになつて居る。其れをば平氣あで歩いて居る男女の姿が、如何いかにも見すばらしい。鐵柵の外には、ベルサイユまで行く田舎通ひの列車が、石油發動機の煙出しから、ポツ／＼と、汚きたない煙を吐出して居るのが、鼠色の霧すきりの中に透見える。場末の物哀さが、貞吉の勇氣をすつかり挫くいてしまつた。地下鐵道の出口の敷石に佇たたずんだまゝ、もう一足も前なる泥濘ぬかるみへ踏出す氣はせぬ。何方どつちへ行くとも、當あてなしに、辻馬車を呼んで見たが、道幅の廣いのと、人が込み合つて居るので聞えない。貞吉は仕方なしに再び地下鐵道メトロへ下りたが、切符を買ふ時に、はたと行先の地名に窮した。モンマルトル！ 聲の出るまゝに云ふ。開札口から貞吉の顔を見た札賣りが、外國人と氣付いて、モンマルトルと云ふ停車場はない。クリツシーか、其の先の停車場で下

りろ。それにはエトワルで乗換へるのだ、と後から人の押して来る忙しい中にも、早口ながら親切に教へた。其が貞吉には理由なく癢に觸つた。教へられた通りの道順で、其の方向に行くのが一種の屈辱であるやうな氣がしてならん。と云つて、もうモンマルトルより外には差當つて行先が思付けない。ます／＼不快に感じながらも、遂にエトワルで乗換へてしまつた。外廻りのブルヴァールへ行く車には碌な奴は乗らない。安官員か商店員見た様な奴ばかりだ。女と云へば女工か賣子位がせい／＼だが、この方はそれほど不愉快ではない。何か糸口を見付けて話でもすれば、晩飯に連れて行つた歸りにや、直ぐ云ふ事をきゝさうに見える。貞吉は、と云つて別に目的のあるでもないのに、傍に居た若い女が、忙しく座を立つや、其の後につゝいて車を出た。停車場の壁に、ガラス、ブランシュとしてある。女の姿は忽ち雑沓の中に紛れ込んでしまつた。貞吉は直ぐと忘れてしまつて、又別の女の後に従ひながら、人崩れと共に外へ出た。

もうガス燈がついて居るけれど、晝間見ると、夜半には、放蕩の馬車で埋つてしまふこの歡樂の大路も、一條の汚い塙末の街道に過ぎない。有名な美女亂舞の劇場ムーランルーデュの風車小屋は、破れた物置場見たやうだし、見世物『地獄極樂』の入口なぞは、彫刻の色彩が、二目と見られぬ程きたならしい。霧は小雨になつて居る。其れでも近所の古片れ屋の前には傘もさゝぬ女供が大勢集つてゐる。貞吉は、食事すべき料理屋の問題を決定しやうと、先づカフェーに這入つた。

巴里中は何處でもそれ相當に案内は知つて居る。この近所の綺麗な料理屋は、全體が芝居歸りの當込みだから、まだ時間が早い。早いのみならず、馬鹿に高くて、男一人で食事すべき場所でもない。と云ふと、中等の處が無くて、どうしても、ぐツと下等な安飯屋ばかりになる。たか／＼二フラン半(我一圓)のおきまり、ターブルドートと來れば葡萄酒もつくわけだ。其れも經濟でいゝ。

貞吉は、フランス人が食慾をつけるとか云つて、きまつて食事前には飲むアペリチフ